

# 英語の同族目的語構文について

西尾美穂

(高知大学教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門)

On the English Cognate Object Constructions

Miho Nishio

*Kochi University Research and Education Faculty Humanities and Social Science Cluster Humanities and Social Science Unit*

**Abstract:** This paper gives an overview of the properties of the English cognate object constructions (COCs), and then make a comparison with the Japanese COCs. It is shown that the Japanese COCs are more restricted and COCs in ancient Japanese had an emphatic function.

キーワード：同族目的語構文, 英語, 日本語

Keywords: cognate object constructions, English, Japanese

## 1. はじめに

英語の同族目的語構文は、Jespersen(1954)などの伝統文法・Quirk et al.(1985)のような記述的文法・安藤(2005)のような参照文法でも扱われている文法項目であるが、生成文法・機能的構文論・認知文法論・構文文法など様々な立場の理論的言語学でも近年盛んに研究がなされている。本稿では、これまでに明らかにされてきた英語の同族目的語構文の特性を概観した後、今後の日英語対照研究への取り掛かりとして、日本語の同族目的語構文との比較を行う。

## 2. 現代英語の同族目的語

Jespersen(1954, p.234)は、同族目的語は結果の目的語(object of result)の下位分類であるとし、Quirk et al.(1985, p.750)は、同族目的語は動詞が表す事象(event)を表すという点で結果の目的語(resultant object)に類似していると述べている。

- (1) a. Chris will sing a song for us.
- b. They fought a clean fight.
- c. He died a miserable death.
- d. She lived a good life.
- e. He breathed his last breath.

(Quirk et al. 1985, p.750)

Quirk et al.は、同族目的語の主要部の名詞は「意味的にそしてしばしば形態的に動詞と関連づけられる(semantically and often morphologically related to the verb)」と述べているが、細江(1999, p.131-p.132)は、同族目的語を形式の上から(2)-(4)の3種類に分類している。

## (2) 全く動詞と同一根の語であるもの

- a. Troy began to laugh a mechanical laugh. (Hardy)
- b. Philip smiled his charming smile. (Katherine Mansfield)
- c. Live your life, for Time is fleeting. (Noel Coward)
- d. He died the death of a hero. (Thackeray)
- e. After that I slept the sleep of the just. (H. R. Haggard)
- f. As I slept, I dreamed a dream. (Bunyan)
- g. I have fought a good fight. (2 Timothy, iv. 7)
- h. The bat hath flown his cloistered flight. (Shakespeare)
- i. He sighed a sigh, and prayed a prayer. (Scott)
- j. Amyas slept that night a tired and yet a troubled sleep. (Kingsley)

(細江 1999, p.131-p.132)

## (3) 異根ではあるが、同意義または類似意義を持つもの

- a. Death / Grinned horrible a ghastly smile. (Milton)
- b. It blew a terrible storm indeed. (Defoe)
- c. Thither he wings his airy flight. (Cowper)
- d. Curiosity and timidity fought a long battle in his heart. (Stevenson)
- e. The bells of the old Raveloe church were ringing the cheerful peal. (Eliot)
- f. The disease ran its course. (Hardy)
- g. You run the risk of excommunication. (Galsworthy)

(細江 1999, p.132)

## (4) 最上級の形容詞のみをとどめて、名詞を省略したもの

- a. It was in this chamber he breathed his last (breath). (Charlotte Bronte)
- b. The gale blew its hardest. (Gissing)
- c. Let the wind and thunder roar their loudest. (W. H. Hudson)
- d. Homer ran his fastest. (Seton. Merriman)
- e. I want you to look your best. (Aldington)

(細江 1999, p.132)

安藤(2005, p.38)は、同族目的語には様態副詞の機能を果たすものと目的語の機能を果たすものがあるとする。

## (5) 様態副詞の機能を果たすもの

- a. John lived a happy life.
- b. She dreamed a strange dream.
- c. John slept a sound sleep.
- d. He died a heroic death.
- e. Troy began to laugh a mechanical laugh. (Hardy, *Far from the Maddening Crowd*)
- f. I was walking along thinking my own thoughts. (McBain, *Ten Plus One*)
- g. Kim grinned a victorious grin. (Steel, *Summer's End*)

(安藤 2005, p.38-p.39)

## (6) 目的語の機能を果たすもの

- a. Mary sang a beautiful song.
- b. I may be killed or live a life of adventure.
- c. I assure you that I can fight my own battle. (Doyle, *The Lost World*)

(安藤 2005, p.39)

Quirk et al.(1985, 750)は同族目的語は orotund style (気取った、仰々しい文体) であるとしているが、安藤(2005, 39)も、様態副詞の機能を果たす同族目的語構文について、話し言葉では通例 lived happily や laughed mechanically のような様態の副詞語句で言い替えられるとしている。

安藤(2005)が様態副詞の機能を果たすとしている同族目的語と目的語の機能を果たすとしている同族目的語は、それぞれ、

Massam(1990, p.164)が真の同族目的語(true cognate object)と呼んでいるものと他動詞化目的語(transitivizing object)と呼んでいるものにあたる。

## (7) 真の同族目的語

- a. Henleigh smiled a wicked smile.
- b. St. Dymphna died a miserable death.
- c. Rosamond cried a good long cry, then she felt better.
- d. Reverend Tully prays a solemn prayer.

(Massam 1990, p.164)

## (8) 他動詞化目的語

- a. Bernadette danced the Irish jig.
- b. Tosca sang an aria.
- c. My clairvoyant dreamt the most unusual thing.

(Massam 1990, p.163)

他動詞化目的語は、受動化(passivization)・話題化(topicalization)・代名詞化(pronominalization)・定性(definiteness)・What による疑問詞化(questionability)など通常の目的語の特性を示すが、真の同族目的語はそれらの特性を示さない。

## (9) 他動詞化目的語

- a. The Irish jig was danced by Bernadette Dooley. (受動化)
- b. The Irish jig, nobody danced. (話題化)
- c. I sang the aria then Tosca sang it. (代名詞化)
- d. Fred danced the slow number. (定性)
- e. What did Tosca sing?(what 疑問詞化)

(Massam 1990, p.163-p.164)

## (10) 真の同族目的語

- a. \*A silly smile was smiled (by Ethel).
- b. \*A silly smile, nobody smiled.
- c. \*Maggie smiled a silly smile, then her brother smiled it.  
?Maggie died a slow death, and her brother died one too.
- d. ?He lived the quiet life.  
?She smiled the happy smile.
- e. \*What did he die?

(Massam 1990, p164)

大室(2018, p.25)によれば, 同族目的語構文の基本形は, (11)に挙げられている特徴を兼ね備えた(12)のような文である。

- (11) a. 動詞と形態的に同族の名詞が目的語位置に生起している.
- b. 動詞と目的語名詞句との間にコンマがない.
- c. 目的語名詞句が何らかの修飾語句を伴っている.
- d. 動詞は自動詞のうち非能格動詞が用いられている.
- e. 能動文であって受動文ではない.

(大室 2018, p.25)

- (12) a. Dr Gerald smiled a quick comprehending Gallic smile. (A. Christie, *Appointment with Death*)
- b. Miss Waynflete laughed her ladylike little laugh again. (A. Christie, *Easy to Kill*)

(大室 2018, p.25)

また, (11)に挙げられた特徴のいずれかを欠いた変種も存在することが指摘されている。

- (13) 動詞と同一形態以外の目的語を取るもの。ただし動詞に対応する同族名詞の一種であり, 同族名詞より特定のな名詞でなければならぬ。
- a. He slept a fitful {sleep/slumber}.
- b. He smiled a knowing {smile/?smirk}.

(Horita 1996, p.225)

## (14) 動詞と同族目的語の間にコンマが置かれたもの

- a. Mr. McDeere smiled, a rather nervous smile. (J. Grisham, *The Firm*)
- b. Nofret laughed, a short, rather bitter laugh. (A. Christie, *Death Comes as the End*)

(大室 2018, p.30)

## (15) 修飾語句を欠くもの

They've walked the walk and talked the talk, and now they're picking pictures. (*TIME* CD-ROM)

(大室 2018, p.31)

## (16) 非対格動詞が用いられるもの

The stock market dropped its largest drop in three years today.

(高見・久野 2002, p.142)

## (17) 受動形であるもの

Pictures were taken, laughs were laughed, food was eaten.

(高見・久野 2002, p.166)

堀田(2018, 2.2 節)では, 同族名詞を修飾する形容詞と対応する副詞を伴った自動詞文による言い換えが常に可能なわけではないことが指摘されている。

## (18) a. Susan slept a sound sleep.

b. Susan slept soundly.

(堀田 2018, p.146)

## (19) a. Mary dreamed a strange dream.

b. \*Mary dreamed strangely.

(堀田 2018, p.147)

また, 同族名詞の修飾内容が豊富で, それに対応する副詞が存在しない場合も指摘されている。

## (20) a. Willy sneezed a sneeze that would wake up the dead.

b. The actress smiled the smile of a temptress.

c. Tessa stopped crying and sighed a deep, uncontrollable sigh like a yawn.

(a, b Rice 1988, p.209; c BNC; 堀田 2018)

Jespersen(1954, p.235), 堀田(2018, 148), 大室(2018, p.48)などで述べられているように, 同族目的語構文は, 形容詞・関係節・前置詞句などを用いて, 自動詞と副詞の組み合わせでは表現しにくい行為の特性を詳細に記述する機能をもった構文である。

## 3. 日本語の同族目的語構文との比較について

日本語の同族目的語構文としては, 「歌を歌う, 踊りを踊る, 病を病む, 長息を患う, 舞を舞う」など日常的に用いられる表現がある。これらの表現における同族目的語は, 受動化・「何」による疑問詞化・代名詞化を許すので, Massam(1990)の分類によると「他動詞化目的語」である。(岸本 2005, p.139)

## (21) a. その踊りはメアリーたちによって踊られた。

b. メアリーは何を踊ったの?

c. メアリーはそれを踊った。

(岸本 2005, p.139)

安藤(2005, 39)では, 次のような「真の同族目的語」と思われる例が「有標の例」として紹介されている。

## (22) a. 寅治郎は穏やかな笑いを笑った。(夏野澤夫『カルロス・モンソン』)

b. 学生の頃は, 校庭の樹陰で, 書物で顔を覆って, 爽やかな青春の眠りを眠った。(井上靖「青葉」)

(安藤 2005, p.39)

乾(1949, p.274-p.276)は, 以下のような同族目的語表現の使用例を挙げて「西洋的表現の強い影響もまた見逃すわけにはゆかない」(乾 1949, p.275)と述べている。

## (23) (表記の都合上, 仮名遣いや字体の異なるところもある)

a. ふるびたるおもひを思ひ恋を恋ひかくして今日の日を失ひぬ(尾上柴舟「永日」)

b. 氏はトルストイの人間の悩みを同じく悩んだ人ではないかと思ふが(徳田秋聲「老人眼鏡」)

c. 千年の昔に苦しんだ人間苦の一つを今も苦しんでゐる一人の少女の身の上(菊地寛「慈悲心鳥」)

d. この無感覚状態から脱却し, 悲しみを悲しみ, 喜びを喜ぶ血の通った人間に立ち還らなければ日本は再生しないと思ふのである(朝日, 昭, 21/2/21)

e. そして保田與重郎君等の新しいエッセイ文学が, 正にその意志を意志した或る物に外ならないのだ(萩原朔太郎「日本への回帰」)

- f. 江戸から八十三里の余も隔たった木曾の山の中に住んで、鎖国以来の長い眠りを眠りつけて来たものは・・・(島崎藤村「夜明け前」)
- g. 華かでしかも寂しく、豪奢でしかもつまやかに、恭敬にしてしかも放胆に、幸福にしてしかも不幸に、矛盾の生活を生きたこと彼の如きも稀であろう(天野貞祐「をりにふれて」後記)
- h. 歩きながら、何を思ひ出すのか、一人でにやつと不気味な笑ひを笑つてゐる(織田作之助「四月馬鹿」)
- i. あそびをあそんだ鴟外にとつて、悦ばしき「生の内容」は何によつて充たされようとしたのであらうか(三枝博音「日本文学への眼」)
- j. 鉄の身体、鉄の意志を以て人間わざとは思はれない程の立派な働きを働いて下さいます(教育報国号献納式学童代表の答辞)
- k. 徐々にではあるが自治の向つて進むための戦ひを戦ふ権利を学びとつた(中野好夫「自覚と反省」)

(乾 1949, p.274-p.275)

堀田(2009, p.93)は日本語で同族目的語が生起しうる条件を次のように述べている。

- (24) 日本語における同族目的語は、自他交替が不明確、あるいは自動詞形のみが存在する動詞が副詞句などを用いて動詞の様態を表わしえない場合に生起すると考えられる。しかし、ヲ格同族目的語構文とデ格の同族名詞句構文が存在する場合にはこの原則が減り立たないが、両者に意味的に使い分ける必要があるため生起しうる。

(堀田 2009, p.93)

- (25) 自他交替が不明確な動詞

- a. \*話を話す。
- b. ヤバそうな話を話す。≠ヤバそうに話す。
- c. \*日本軍が戦いを戦った。
- d. 日本軍が非常に苦しい戦いを戦った。

(堀田 2009, p.87)

- (26) a. 今自分ができる精一杯の走りを走るのが目標だ。  
b. 今自分ができる精一杯の走りで走るのが目標だ。

(堀田 2009, p.92)

(26a)は文全体として「そのような結果を残すことが目標である」というニュアンスをもち、結果を表すのに対して、(26b)は、そのような様態で走っているという動作の補足的情報を提供するにすぎないという意味の違いがあると述べられている。ただし、(24)の条件を満たせば同族目的語構文が成立するというわけではない(堀田 2009, p.93)。実際、安藤(2005)、堀田(2018)、大室(2018)などで英語の同族目的語構文に付されている日本語訳でも、「踊りを踊る」のような他動詞化目的語の例を除いては、同族目的語表現は一つも用いられていない。

日本語で同族目的語構文が用いられにくいことには、二格やデ格を用いて行為の様態を描写できることや副詞による修飾が比較的自自由であることが影響していると考えられる。

- (27) ひた隠しに隠す、平謝りに謝る、うなぎ上りに上る、土砂降りに降る、韋駄天走りに走る、うれし泣きに泣く、大笑いに笑う

(乾 1949, p.276 注 1b)

- (28) 小走りで走る、二足歩行で歩く、悲しげな笑顔で笑う

(堀田 2009, p.86)

- (29) a. 花子は暖かく、幸せそうに微笑んだ。  
b. \*She smiled warmly happily.  
c. She smiled a warm, happy smile.

(堀田 2009, p.85)

最後に簡単に歴史的な変化を見ておく。英語では、古英語の時代から他動詞を含む同族目的語構文と自動詞を含む同族目的語構文の両方が存在した。

(30) a. 他動詞: …7 tu folc gefeoht gefuhton(=…and fought two pitched battles)

(Chron A 80, 27 (887): 小野・中尾 1980, p.285)

b. 自動詞: Se cyning Egglippus leofode his lif on eawfæstre drohtnunge(=The king Egypus lived his life in pious tenor)

(ÆC Hom II, 476, 16: 小野・中尾 1980. P.285 )

Visser(1963, p.415)によれば, 自動詞に伴う同族目的語は, 古英語ではやや稀であり, 中英語で徐々に頻度が増し, 近代英語でかなり多数になったということだが, 常に何らかの形で特定化・修飾されている(always specified or qualified in one way or another)ということである。中尾(1972, p.287)では, 中英語の同族目的語構文について, もともと他動詞であったものは修飾語を伴わない目的語と共起する傾向が強いに対して, もともと自動詞であったものは修飾語を伴う目的語と共起する傾向が強いと述べられている。英語の自動詞同族目的語構文の本質は古い時代から様々な修飾語句を伴って動詞が表す行為を特定化することにあつたと考えられる。これに対して日本語では, 乾(1949, p.275)によれば, 「いを寝る」, 「ねを泣く」などその固有の同根目的語は, 修飾語を伴わない用法が本来的であつて, 古くは「いをやすく寝る」, 「度遍く嘆く嘆」のように修飾語句が動詞に付帯していた。

(31) a. 五月雨はいこそ寝られぬほととぎす夜深く鳴かん声を待つとて (拾遺集)

b. 大和恋ひ寝の寝られぬに心なく此洲の崎に田鶴鳴くべしや (万葉集)

c. 夢ならで又も逢ふべき君ならば寝られぬいをも歎かざらまし (詞花集)

d. ほととぎす一声鳴きて往ぬる夜はいかでか人のいをやすく寝る (新古今集)

e. しばしこそ物いそがりかりしか, 夜も寝もねず (落窪物語)

f. 君一人臥してもねられぬままに (落窪物語)

g. 身のうさを歎くにはあかて明る夜はとりかさねてぞねも泣かれける (源氏物語)

h. 山寺の入相のこゑにそへもね泣きがちにてぞ過し給ふ (源氏物語)

i. ねを泣き給ふさまの心ふかくいとほしければ (源氏物語)

(乾 1949, p.273)

小柳(1999)は, 万葉集を中心に日本語の古代語の同族目的語について論じ, 「眠を寝・音を泣く」のような自動詞を含む同族目的語構文も, 「言を言ふ・枕を枕く」のような他動詞を含む同族目的語構文も, 同族目的語を持たない述語よりも強調された表現であると述べている。

(32) a. 家思ふと眠を寝ずをれば, 鶴か鳴く葦辺も見えず。春の霞に。(小柳 1999, p.16)

b. 剣大刀身に副ふ妹を取り見がね, 音をぞ泣きつる。手児にあらなくに。(小柳 1999, p.18)

c. ありありて後も逢はむと言のみを堅め言ひつつ, 逢ふとはなしに。

d. うつくしき人の枕きてし, しきたへの我が手枕を枕く人あらめや。(c, d 小柳 1999, p.20)

葛西(1980, p.17)は, 以下の例において, 同族目的語はリズムを確保するために用いられていると述べているが, 日本語でも同様の動機づけがあるのかもしれない。

(33) a. And Israel vowed a vow, unto the Lord…(Nun. 21:2)

b. And Joseph dreamed a dream and he told it…(Gen. 37:5)

(葛西 1980, p.17)

#### 4. まとめ

本稿では, まず英語の同族目的語の特徴を概観し, その本質的な機能が動詞の表す行為を特定することであることを見た。次に同様の機能を果たす同族目的語構文は日本語ではその使用が非常に限られており, 日本語本来の同族目的語の用法とは異なっていることを見た。これをもとに, 今後は歴史的観点を含め日英語の同族目的語構文の対照的研究を進めていきたい。

- 安藤貞雄(2005)『現代英文法講義』開拓社, 東京.
- 乾亮一(1949)「いわゆる COGNATE OBJECT について—その機能と国語への影響—」『英文学研究』26(2), 261-276.
- 岩倉国浩(1976)「同族目的語と様態の副詞と否定」『英語教育』6月号 60-63.
- 大庭幸男(2011)「英語の同族目的語構文の特性について」『待兼山論叢. 文化動態論篇』45, 95-118.
- 大庭幸男(2013)「英語の同族目的語構文の統語構造について」『英文学研究 支部統合号』7(0), 201-207.
- 大庭幸男(2018)「自動詞から他動詞へ—他動詞文の構造パターンを利用して—」『英語学を授業に活かす—市川賞の精神を受け継いで—』池内正幸・窪園晴夫・小菅和也(編), 137-157, 開拓社, 東京.
- 大室剛志(1990)「同族目的語構文の特異性(1)」『英語教育』11月号, 74-77.
- 大室剛志(1990)「同族目的語構文の特異性(2)」『英語教育』12月号, 78-80.
- 大室剛志(1991)「同族目的語構文の特異性(3)」『英語教育』1月号, 68-72.
- 大室剛志(2000)「特定の同族目的語について」『英語教育』9月号, 29-31.
- 大室剛志(2002)「有標構文における有標性」『英語語法文法研究』9, 35-50.
- 大室剛志(2005)「構文の基本形と変種—文法事項の配列順序への示唆—」『国際開発フォーラム』29, 91-104.
- 大室剛志(2018)『ことばの基礎2 動詞と構文』〈シリーズ〉英文法を解き明かす—現代英語の文法と語法②, 研究社, 東京.
- 小野茂・中尾俊夫(1980)『英語学大系8 英語史I』大修館書店, 東京.
- 小野塚裕視(2000)「同族目的語構文の相特性をめぐって」『筑波英学展望』19, 33-41.
- 葛西清蔵(1980)「‘to dream a strange dream’の構造:「同族目的語再考」」『北海道大学文学部紀要』28(1), 1-24.
- 葛西清蔵(2003)「『文型』再考(1)—「追加表現」と「語順の圧力」—」『札幌大学総合論叢』15, 1-15.
- 河上誓作(1967)「特殊な“S+V+O”構文における目的語およびその修飾語の機能について」*Osaka Literary Review* 6, 50-72.
- 岸本秀樹(2005)『統語構造と文法関係』くろしお出版, 東京.
- 北原賢一(2006)「現代英語における同族目的語構文の実態—構文文法的観点から—」『英語語法文法研究』13, 51-65.
- 北原賢一(2011)「動詞 die と同族目的語構文—語彙・構文のアプローチによる記述的考察—」『英語語法文法研究』18, 63-78.
- 北原賢一(2012)「同族目的語構文と軽動詞構文」『麗澤レビュー』18, 3-16.
- 久米祐介(2015)「同族目的語構文の歴史的発達—live と die を中心に—」『近代英語研究』31, 19-43.
- 小柳智一(1999)「『眠を寝』など—同族目的語構文について—」『日本語学』18(1), 15-25.
- 澤野亜美(2017)「自動詞の他動詞構文についての意味論的アプローチ」『静岡大学教育学部研究報告(人文・社会・自然科学篇)』67, 29-42.
- 高見健一・久野暉(2002)『日英語の自動詞構文』研究社, 東京.
- 田中彰一(1990)「自動詞の他動詞的構文について」『長崎大学教養部紀要(人文科学篇)』30(2), 37-58.
- 中尾俊夫(1972)『英語学大系9 英語史II』大修館書店, 東京.
- 中島平三・池内正幸(2005)『明日に架ける生成文法』開拓社, 東京.
- 島山雄二・本田謙介・田中江扶「自動詞の新分類—there 構文, way 構文, 同族目的語構文の見地から」『言語』35(7), 81-87.
- 濱田英人(1997)「非典型的な目的語の意味構造について」『文化と言語: 札幌大学外国語学部紀要』31(1), 83-108.
- 林高宣(2012)「同族目的語構文における動詞—動詞アスペクトの再解釈について—」『島根大学教育学部紀要(人文・社会科学)』46, 111-117.
- 藤田耕司・松本マサミ(2005)『語彙範疇(D)動詞』英語学モノグラフシリーズ6, 研究社, 東京.
- 細江逸記(1999)『英文法汎論 新版』篠崎書林, 東京.
- 堀田秀吾(2009)「日英語の同族目的語構文の機能構文論的比較」『明治大学教養論集』439, 73-95.
- 堀田優子(2005)「同族目的語構文のカテゴリーに関する一考察」『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』25, 67-88.
- 堀田優子(2018)「Mary smiled a merry smile. は「陽気な微笑みを微笑んだ」?—同族目的語構文の意味特性と意味解釈—」『英語学が語るもの』米倉綽・中村芳久(編), くろしお出版, 東京.

- 松本マズミ (2017) 「データから見た英語同族目的語構文の特性」『大阪教育大学英文学会誌』62, 113-132.
- 三輪健太 (2011) 「結果構文と同族目的語の異同と二次述語との統語的相関性」『学習院大学英文学会誌 2011』68-82.
- Dixon, R. M. W. (1990) *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principle*, Oxford: Clarendon Press.
- Hoche, Silke (2009) *Cognate Object Constructions in English*, Gunter Narr Verlag Tübingen: Tübingen.
- Horita, Yuko (1996) "English Cognate Object Constructions and Their Transitivity," *English Linguistics* 13, 221-247.
- Horrocks, Geoffrey and Melita Stavrou (2010) "Morphological Aspect and the Function and Distribution of Cognate Objects Across Languages," in M. Rappaport Hovav, E. Doron, and I. Sichel (eds.) *Lexical Semantics, Syntax, and Event Structure*, Oxford and New York: Oxford University Press.
- Iwasaki, Shin-ya (2007) "A Cognitive Analysis of English Cognate Objects," *Constructions* 1, 1-40.
- Jespersen, Otto (1954) *A Modern English Grammar on Historical Principle*, Part III Syntax Vo II, London: George Allen and Unwin LTD.
- Jones, M. A. (1988) "Cognate Object and the Case Filter," *Journal of Linguistics* 24, 89-110.
- Kim, Jong-Bok and Jooyoung Lim (2012) "English Cognate Object Construction: A Usage-based, Construction Grammar Approach,"
- Kitahara, Ken-ichi (2006) "Cognate Object Constructions in English: A Construction Grammar Approach," *Tsukuba English Studies* 25, 89-106.
- Kitahara, Ken-ichi (2007) "On the Predicative Cognate Object Construction and the Adjunct Resultative Construction: A Construction Grammar Approach to Language Universals," *Tsukuba English Studies* 26, 67-90.
- Kitahara, Ken-ichi (2011) "Cognate Object Constructions Are Not Monotransitive Constructions," *Tsukuba English Studies* 30, 23-50.
- Kogusuri, Tetsuya (2011) "Conditions on the Passivization of Cognate Object Constructions," *Tsukuba English Studies* 30, 51-78.
- Langacker, R. W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. II, Stanford: Stanford University Press.
- Lavidas, Nikolaos (2013) "Null and Cognate Objects and Changes in (In)transitivity: Evidence from the History of English," *Acta Linguistica Hungarica* 60(1), 69-106
- Lavidas, Nikolaos (2014) "Cognate Arguments and the Transitivity Requirement in the History of English," *Lingua Posnaniensis* 56(2), 41-59.
- Levin, Bess (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Macfarland, Talke (1995) *Cognate Objects and the Argument/Adjunct Distinction in English*, Doctoral dissertation, Northwestern University.
- Matsumoto, Masami (1996) "The Syntac and Semantics of the Cognate Object Construction," *English Linguistics* 13, 199-220.
- Massam, Diane (1990) "Cognate Objects as Thematic Objects," *Canadian Journal of Linguistics* 35(2), 161-190.
- Milto, I. M. (2007) "Dream a little dream of me: Cognate Predicates in English," 26<sup>th</sup> Conference on Lexis and Grammar, Bonifacio, 2-6 October 2007.
- Moltmann, Frederika (1989) "Nominal and Clausal Event Predicates," *Papers from the Annual Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society* 25, 300-314.
- Nakajima, Heizo (2006) "Adverbial Cognate Objects," *Linguistic Inquiry* 37, 674-684.
- Ogata, Takafumi (2008) "Cognate Object as Categorical Expressions," *Journal of Chikushi Jogakuen University and Junior College* 3, 1-14.
- Osaki, Hisao (1998) *Old English Cognate Objects: Anglo-Saxon Tradition and Latin Influence in Their Development*, Osaka: Koshinsha.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, London and New York: Longman.
- Rice, Sally (1988) "Unlikely Lexical Entries," *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 202-212.
- Sailer, Manfred (2010) "The Family of English Cognate Object Constructions," *Proceedings of the 17<sup>th</sup> International Conference on Head-Driven Phrase Structure Grammar, Universite Paris Diderot, Paris 7, France*, 191-211, Stanford, CA: CSLI Publications.
- Visser, F. Th. (1963) *An Historical Syntax of the English Language*, Leiden: E. J. Brill.

平成30年 (2018) 10月11日受理

平成30年 (2018) 12月31日発行